

人間本性論再考

ー スティーブン・ピンカーの所説を手がかりにー

久木田美枝子 上瀧 真生

1. はじめに

本稿は、人間本性論に関する考察である。人間本性論は、生物進化論、行動進化論、言語進化論が明らかにした人間の生得的側面を総合した人間論である。

本稿が対象とするスティーブン・ピンカーは、視覚的認知能力と子供の言語能力の発達を研究しており、ノーム・チョムスキーの影響を受け、脳機能としての言語能力や言語獲得について心理学的な見地から言語は生物学的適応であるとの概念を強調している。その人間本性論は、総合的なものだが、言語学的根拠に基づいている部分が多い。

しかし、ピンカーが本書を出版した時点（2002年）のチョムスキー言語学は、生得説ではあったものの、遺伝的な発見、すなわち科学的な根拠付けが未発達な状況であった。このため、ピンカーの所説は、科学的というより、哲学的な様相が強く、観念的、空想的なものとして受けとめる向きもあった。しかし、この本の出版の少し前からチョムスキー言語学は進化論的、遺伝的な方向で発展をし始めていた。

今日では、鳥の言語分析（さえずり言語起源説）との学際的な研究も進展し、その遺伝子学的基礎が明らかになり始めている。

その結果、チョムスキーの言語生得説が遺伝子的（科学的）基礎を持つようになり、それを主な論拠とするピンカーの人間本性論も科学的なものとして認められつつある。

そこで、本稿は全体を二つに分け、全般では生成文法の概説をまじえながら、近年の進化言語学の進歩の状況について述べ、その上で後半でピンカーの人間本性論について考察する。前半（1節～4節）は英語学・言語学を専門とする久木田が、後半（5節～11節）は経済学を専門とする上瀧が執筆した。

前半では、チョムスキー言語学が生得説から進化論に発展してきた意味を考察する。またその発展方向がさえずり進化説によって見え始めていることも示す。

後半の基本的枠組みは、ピンカーの人間本性論について、人間の「共同性」と「意識性」を縦軸に、人間本性の「普遍性」、「特殊性」、「個別性」を横軸に整理、考察し、そこから社会の進化の方向（人間に適した社会は何か）まで展開していく。

本書は、社会進化までを考察しているが、広く人間組織の進化にも応用できると思われる。

それでは先ず、ピンカーが多くを依拠しているチョムスキー言語学を概観しながら、近年の遺伝子的、進化論的発展からみていこう。

2. チョムスキー言語学小史

はじめに、チョムスキー理論の変遷に触れてみたい。チョムスキー理論は、初期理論から大きく二つの柱を有しており、一つは自然言語の説明的妥当性を追求した諸理論に基づく分析、もう一つは人間の言語という観点からの哲学的考察である。前者については、理論そのものが精緻さを極めながら大きく変遷し、その説明的妥当性に振り回されるため、対象言語そのものの本質を見極めるのは非常に困難な場合があるとは、経験主義のみに固執する人々からきかれる声でもある。後者については、前者の理論変遷のスピードとは比較にならないぐらい、ゆったりと進展してきたといっても過言ではない。現在までの変遷はあるものの、人間の本性、すなわち、「人間の言語知識とは何か」「言語はどのように獲得されるのか」「言語はどのように使用されるのか」などについて、自然言語を対象として、説明的妥当性を付与するための普遍的手段であり、人間の言語という哲学的命題については、一貫した根流があると思われる。

まず、所謂古典的生成文法、あるいは、初期生成文法の時代と称される時期は、構造主義言語学の舞台がアメリカで隆盛を極めていた時代に、ジュニアフェローとしてハーバードで3年間自由な研究の末発表した論文 *Syntactic Structures*¹ で、従来の言語分析に万能とされていた直接構成素分析が壁につきあたったことを明示し、樹状図を用いて、句構造規則という新たな分析方法を提示したところに、従来の構造主義言語学の分析方法の終焉を示唆した。しかし、この初期の時代においても、文の再帰性もしくは無限性、あるいは、統語的には問題はないが意味をなさない文が存在することも指摘している。この再帰性もしくは無限性の概念については、近年の進化言語学的研究の回帰性と現象を共有するところがあると思われる。言語運用については、非文法的要素を全く想定しない理想化された話者のみを対象としているところから、現実の人間の言語運用とは、懸け離れた理想化と言ってもいいかもしれない。

その後、細かい時代区分として標準理論とされている時代に出版された、*Aspects of the Theory of Syntax*,² *Language and Mind*³ で、人間の言語の本質を指摘している。この時代に所謂、人間の頭の中にある言語を司る機能、Language Acquisition Device (LAD) の概念が誕生し、その後、*Knowledge of Language*⁴ で生得的な初期状態の理論のことを普遍文法 (Universal Grammar) と呼び、詳細な説明がなされている。いずれも、人間に内在している I-language についての理論であり、E-language とは質を異にするものである。

その後、主要な理論としては、拡大標準理論、改訂拡大標準理論、統率束縛理論⁵ を経て、現在まで効力を持ち続けているミニマリストプログラム⁶ と変遷を重ねている。この理論変遷の中では、中心課題は、原理とパラメータ理論に代表されるように、特定言語によらない一般的な原理を解明することが普遍文法の解明とされ、個々の言語に付随する可変部分の特徴を覚えていくことが言語獲得とされていた。

しかし、統率・束縛理論、原理とパラメータ理論などで、非常に複雑な理論体系となり

¹ Noam Chomsky (1957) *Syntactic Structures*, Mouton, The Hague.

² (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

³ (1968) *Language and Mind*, Harcourt, Brace & World, New York.

⁴ (1986) *Knowledge of Language*, 17-22, Praeger, New York.

⁵ (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

⁶ (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

すぎてきてしまったことへの反動からだろうか、ミニマリストプログラム (MP) では、以前の余計な理論は削除してしまい、「併合」あるいは「融合」によって統語範疇ができあがるとしている。MPの時代に突入して以来、生成文法は、生物言語学 (Biolinguistics) の様相を濃くもつようになってきている。MPによって簡潔化された諸規則が多く存在するなかで、UGに対する扱いはむしろ以前のそれとは逆行していると思われる。すなわち、UGのみが人間の言語の生物学的資質、すなわち生得的資質と考えられ、進化言語学と深くかかわっているはずだという考察である。

その後、更に、生物言語学の傾向を濃く示唆しているものとして、*New Horizons in the Study of Language and Mind*⁷ があり、最近の著書で、遺伝的特質、外的データーについても言及している。^{8 9}

3. 現在の生成文法の学際性

近年の生成文法の新たな発展は、その周辺科学の目覚ましい発展に寄与するところが大きいと考えられる。認知科学の発展、特に認知脳科学の発展には、周辺の医療機器の発展と相まって、人間の言語活動時の脳の状態を計測可能にしたことである。これにより、母語獲得の際の獲得の順序、更に、第2言語獲得の際、学習者が新たに言語野を形成し、あらたなUGを形成可能ではないかと推測させるような、科学的根拠に基づく、可視的観察が可能になった点は大きい。

更に、遺伝子学、生物進化学の領域の発展にも大きく寄与している。従来哲学的あるいは立証不可能といわれた言語の生得説が、言語獲得の遺伝子の発見によって大きく認識が変化してきているという点があげられる。¹⁰ それに関する説明は以下のようなものである。¹¹

1990年にイギリスのKEと呼ばれる家族・家系三世代の30人のうち、16人が不全失語症だと診断されたという報告がありました。その人たちは、動詞の屈折語尾や名詞の複数形を正しく産出できないという症状を示しました。その後、彼らは、*FOXP2*(Forkhead box P2) 遺伝子に異常が生じているということが発見され、すなわち *FOXP2* は、言語専用・文法遺伝子ではないかという話題になりました...

FOXP2 遺伝子は、ひとでいうと第7染色体上にあって、遺伝子の発現を制御する転写因子(transcription factor)をコード化する遺伝子です。この遺伝子は、チンパンジー、ゴリラなどの霊長類、マウス、そして、キンカチョウ、コウモリといった鳥にも見られる古い遺伝子ですが、ひとの *FOXP2* だけ、2箇所(他には見られない)ア

⁷ Noam Chomsky (2000) *New Horizons in the Study of Language and Mind*, Cambridge University Press, Cambridge, UK.

⁸ _____ (2005) "Three Factors in Language Design," *Linguistic Inquiry* 36, 1-22.

⁹ _____ (2007) "Approaching UG from Below," In Uli Sauerland and Hans-Martin Gartner (eds.) *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, 1-29, Mouton, Berlin.

¹⁰ Cedric Boeckx (2010) *Language in Cognition: Uncovering Mental Structures and the Rules Behind Them*, Wiley-Blackwell, Chichester, West Sussex.

¹¹ 池内正幸 (2010) 『ヒトのことばの起源と進化』, 88, 開拓社, 東京.

ミノ酸の変異が起きています。その変異がおおよそ20万年前に起きたということが分かりました。20万年前といえば、ホモ・サピエンスが出現した時期と重なりますので、なおいっそう *FOXP2* は文法遺伝子かもしれないということになったわけです。

その後、ことばを持っていなかったとされるネアンデルタール人の *FOXP2* も、現世人と同じ2箇所の変異を持っていることが分かりました。

上述のように、ひとの遺伝子の発見は、生成文法初期から想定していた、心的仕組みあるいは脳の内部にひとのみが持つ言語能力が生得的に組み込まれており、言語獲得装置の中に搭載されている普遍文法が生得的に存在しているという、チョムスキーの仮説が、科学的に実証されたものと考えられる。更に、言語進化の観点からは、ひとのみに存在している *FOXP2* の2箇所のアミノ酸の20万年前の変異がホモ・サピエンスが出現した時期と重なる点は、偶然の一致とは考えにくい点で、この遺伝子が文法遺伝子ではないかと考える可能性が強まると考えられる。

言語進化に関しては、従来の生成文法からは関連付けが困難であったと思われるが、より簡潔なMPが誕生したために、そのような方向性が可能になったと言えると思われる。

4. 歌文法からひとの文法へ¹²

ひとの言語の起源について仮説を提示するために、ひとの言葉と鳥の歌の本質的な違いを指摘し、神経科学的な実験に基づいて、言語の起源を解明しようとした岡ノ谷氏の革新的な研究は、MPが進化言語学へと発展可能であるということを示唆していると思われる。

岡ノ谷氏は、ジュウシマツの歌文法を、歌をチャンクに分け、チャンクどうしがどのような関係で出現するかを記述し、理論言語学の手法に基づいて、文字列から文法規則を抽出する方法を、ジュウシマツの歌文法に応用している。有限状態文法によるジュウシマツの歌文法表記は、以下のように行われている。¹³

まず、分析対象となる鳥の歌を少なくとも2分間録音する。この鳥の歌の一部（約1.6秒分）をソナグラムにする...ソナグラムを眺めていると、ab, cde, fgというチャンクが見えてくる。歌全体をこれらのチャンクで切り分け、チャンクどうしの関係を観察すると...ルールが発見できる。アルファベットで表したものを歌要素、中括弧でくくったものをチャンク、有限状態文法のたどり方をフレーズという。この有限状態文法によって、たとえば, abcdefgab, abcdeabcde, fgなどのいろいろなフレーズがうたわれる。歌要素の種類と有限状態文法の形は個体により異なる。

上述のようにジュウシマツに有限状態文法の文法があることが発見されたことによって、ひとの言語の起源を探ることが可能となるのではないだろうか。ジュウシマツで発見され

¹² 岡ノ谷一夫（2010）『さえずり言語起源論』（岩波科学ライブラリー176）岩波書店、東京。

¹³ 同書、25。

た有限状態の文法は、生成文法の歴史の初期の頃に、規則の適応の無限性を提唱したのと非常に類似した点がみられるのも興味深い発見である。

ジュウシマツのさえずり言語起源論によって、ひとの言語の起源について拡大解釈することができるようである。岡ノ谷氏は、このような仮説を「内容と形式の直接進化仮説」¹⁴と称している。

最近の言語学が、進言言語学の様相を呈していることで、ひとの言語の起源を鳥まで遡って、ひとと同様な初期状態をもつ歌文法が発見され、更に、ジュウシマツの脳で、様々な実験により、特定の文法に関与する脳の部位が解明されつつあるのも、言語学の学際性によって、より人間の本性の研究が科学的に実証されつつあることを示唆するものであり、非常に興味深い。

5. 人間の本性について

さて、ピンカーの人間本性論をどのように評価すべきか。以下、マルクス主義との関係でどう位置づけるべきかを考察する。マルクス主義の中に人間本性の問題を位置づけた先行研究としては、鈴木茂、上野俊樹、向井俊彦の分析がある。¹⁵しかし、鈴木らがその分析の基礎とした諸科学の成果については、今日の諸科学の発展に照らしてみても問い直す必要のある部分も多いように思われる。

特に、その人間本性論はダーウィン進化論における遺伝子の変異とその自然淘汰、性淘汰による進化という考え方を資本主義市場経済の思想を無批判に取り入れたものとして否定し、種主体の進化論を土台として展開されていると思われる。¹⁶しかし今日では、さしあたりは偶然的な遺伝子変異とその自然淘汰、性淘汰の積み重ねとして生物は進化するという進化学説、つまりダーウィンがその基礎を拓いた進化学説のほうが真理に近いと考えられている。¹⁷

では、ダーウィン進化論を基礎にして人間本性について考えてみた場合、鈴木以来の人間本性の分析のどの点を考え直すべきなのだろうか。以下では、ピンカーの所説を一つの手がかりにして、ダーウィン進化論を基礎として人間本性論を捉え直す場合、どのような問題を検討すべきかを考えてみたい。

6. ピンカーのブランク・スレート説批判とマルクス主義批判

ピンカーは、人間の生まれつきはブランク・スレート（「空白の石版」、日本的に言えば「白紙」）であり、人間は後天的に社会関係によってすべて規定されるのだという議論、人間の遺伝的基礎ないし生得的な基礎を認めない議論、あるいはその帰結としての社会構築

¹⁴ 同書、109.

¹⁵ 鈴木(1989)、上野(2002)、向井(2008a)、参照.

¹⁶ 鈴木(1982)、同(1989)、参照.

¹⁷ 長谷川、長谷川(2000)、参照. なお、自然淘汰には、外的な環境によるものだけでなく、すでに獲得されている生物固有の組織や機能との関係での淘汰、体内淘汰が含まれるものと考ええる。

主義を徹底して批判している。

ブランク・スレート説は人種差別や性差別や階級偏見を擁護不能にし、民族の大量殺戮を阻止する防壁となり、回避可能な社会悪について早計な運命論におちいるのを防止する魅力的なヴィジョンだったのであり、そのことによって世俗の信仰となり、時代の共通の良識でありつづけるように見えた。ところが、ブランク・スレート説は、人間の本性を空白とみなすことによって全体主義体制が人間を支配し、大量殺戮を引き起こすことを防止し得なかったのであり、教育や育児や芸術を一種の社会工学に変え、親たちを苦しめ、民主主義の原則や法の支配に対する軽視を招き、人間みずからの道徳的欠点に対して私たちが盲目にしてしまう。ブランク・スレート説は脳の機能についての経験的仮説であり、それが真実かどうかを評価しなければならず、現代の諸科学はそれが真実ではないという所見をどんどん積み上げている。これがピンカーのおおよその主張である。¹⁸

また、彼は、ブランク・スレート説を基礎とする社会構築主義の一つの典型として、マルクス主義を批判している。彼の批判の核心を私なりに敷衍すれば、マルクス主義の主流はブランク・スレート説に依拠しており、そのブランク・スレート説は20世紀「社会主義」国家の警察的支配や暴力を阻止しえなかったということである。白紙である人間の心を「社会主義」的に教化するために全面的な生活管理がおこなわれ、階級的な出自が攻撃の対象となり、個人の能力差を認めないことが能力の高い者への攻撃を招いた、等々、彼はそう批判する。¹⁹

個々人の能力差の存在という点から直接に資本主義社会における階級支配を否定し、また、人間が集団に区分けされると人間集団間に敵意が生じる傾向があることからマルクス主義の階級闘争史観こそが20世紀「社会主義」国家の暴力を招いたと直接的に論断するなど、ピンカーの批判には全面的に同意できない部分も多い。そして、このマルクス主義批判にみられるとおり、彼の主張は一体にブランク・スレート説を批判するに急なあまり、逆に人間の遺伝的ないし生得的な基礎から直接に人間の行動や社会関係を説明しようとする誤りを犯しているようにも思われる——後に述べるように、彼自身、遺伝的ないし生得的な基礎がすべてを決めるわけではないと何度も言っているのだが——。

しかし、マルクス主義の主流が人間の本性を否定し、すべてを社会関係に還元する傾向はあったし、現在もそうであることは事実である。また、そのことが20世紀「社会主義」国家の暴力と警察支配を基礎づける一つの根拠となったという指摘については、やはり真面目に検討する余地があると考ええる。そして、鈴木らに導かれて人間の意識性と共同性をその本性として認める立場でこそ、ピンカーの提起を受け止めてこの問題を検討することができるとも考える。

7. ピンカーが依拠する諸科学の発展

ピンカーが人間は生まれつきブランク・スレートではありえず、遺伝的な基礎ないし生

¹⁸ ピンカー (2004c:268-263)。

¹⁹ ピンカー (2004b:45-46)。

得的基礎があると主張するにあたって依拠しているのは、以下の諸科学の発展である。²⁰

第一は心の科学、認知科学である。それは信念や記憶や思考や欲求などの人間の心の動きが情報、計算、フィードバックという観点から説明できることを明らかにし、さらに人間の認知には生得的装備が必要であり、その装備は生成文法のように普遍的なものでありながら、さまざまな特殊性を発展させるシステムであることを明らかにする。

第二は神経科学、とくに認知神経科学という認知と情動が脳の中で実行される仕組みを研究する分野の発展である。それは生得的な脳の形状や配線が、思考や感情や行動に影響をおよぼすことを示している。

第三に遺伝子が行動に影響をおよぼす仕組みを研究する行動遺伝学である。その研究は、遺伝子がさまざまな脳部位の大きさや形状や配線、さらにホルモンや神経伝達物質の分泌、結合、リサイクルに影響をおよぼし、したがって人間の行動に影響をおよぼすことを明らかにしてきた。

第四は進化心理学であり、それは心の系統発生史と適応機能を研究している。そこでは、人間の認知や情動だけでなく、社会的な行動についても遺伝子の自然淘汰の帰結として理解されている。そして、人間がもつ審美眼や共感、感謝の念、罪悪感、怒りなどの情動、暴力への傾向と平和的協調への傾向などについて、その進化的な根拠が見いだされる。

以上の諸科学、とくに第三の行動遺伝学や第四の進化心理学の説明からわかるように、ピンカーは人間の本性——それは彼にとっては人間の遺伝的基礎ないし生得的基礎と同義である——の存在をはっきりとダーウィン進化論を基礎として主張している。こうした彼の主張と鈴木らによる人間本性理解とを照らし合わせたとき、どのような検討すべき問題があるのだろうか。

8. 人間本性の普遍・特殊・個別

鈴木らは人間の本性をその意識性と共同性として捉えているわけだが、その場合、それは基本的にすべての人間に備わっている普遍的なものとして捉えられている。しかし、ダーウィン進化論を基礎にして人間の本性をその遺伝的基礎、生得的基礎として捉えるピンカーの見地では、そうした理解は一面的なものである——ピンカー自身がそのように総括しているわけではないが、その主張を全体としてみれば、そうなる考える——。これが検討すべき第一の問題である。

もちろん、ピンカーはすべての人間に備わっている普遍的な遺伝的基礎、生得的基礎を否定しているわけではない。彼が人間の認知的な能力やその利己主義と利他主義について論じている場合、すべての人間に備わっている普遍的なものを示すことに多くを費やしている。しかし、人間の本性を考えるうえでは、それだけでは十分でないと考えてもいるようである。それは一つには、遺伝的変異の存在とその自然淘汰による進化という見地から、諸個人の遺伝的な多様性を考慮に入れなければならないと考えるからである。次の文章は、その点をよく示している。

²⁰ ピンカー (2004a:69-121).

正常な人たちのあいだに見られる遺伝的な多様性の意味も（障害の原因になる遺伝的欠陥だけではなく）、じっくりと慎重に考える必要がある。人びとのあいだに見られる生得的な差異と、種全体に普遍的である生得的な人間の本性は同じものではない。人びとがどのように多様であるかを実証しても、人間本性の働きは直接あきらかにはされない。…（略）…しかし、遺伝的変異はまちがいになく人間の本性に一定のかわりをもっている。ある心が遺伝的変異をする道筋がたくさんあるのなら、その心には、変異を可能にする遺伝的影響を受けるパーツや属性がたくさんあるはずだ。同様に、生物学にもとづいた現代の人間本性に関する概念は、どんな概念でも…（略）…、人間本性を構成する能力は、たとえ基本設計（働く仕組み）が普遍的であっても、量的多様性を示すということを予測するはずだ。自然淘汰は遺伝的変異に依拠しており、多世代にわたって生物をつくりあげながら遺伝的変異を減少させはするが、完全になくしてしまうことはないからである。²¹

つまり、ピンカーは個々人の認知能力や利己主義と利他主義といった心理的特性のばらつきには遺伝的ないし生得的基礎があることを指摘しているわけである。もちろん、この基礎がすべてだと言っているのではない。遺伝子が心のあらゆる細部まで決定すると考えるのは、二つの点で誤りだとしている。一つは、行動遺伝学の成果によれば、ほとんどの心理的特性はある環境内のばらつきの半分が遺伝子と相関しているにすぎないからであり、もう一つには遺伝子の作用は環境によって変わるからである。²² しかし、そうしたばらつきに遺伝的ないし生得的基礎があるということは、社会関係によってそれをなくしてしまうことはできないということであり、そういう意味で人間の本性の一面をなしていると捉えなければならないということであろう。

人間の本性をすべての人間に生得的に備わっている普遍的なものを指摘するだけですませられないとピンカーが考えるのには、もう一つの根拠があるように思う。それは、人間が有性生殖をする哺乳類であるということである。

有性生殖をする哺乳類のオスとメスは、子どもを残すためにオスとメスの一対がどうしても必要であるという点では相互に前提しあう関係であるが、子どもを残すための親としての投資という点では相互に対立的な関係である。ピンカーはこの対立について次のように要約している。

哺乳類では、親としての最低限の投資はオスとメスとで大きく異なる。オスは数分の性交とスプーン一杯分の精液ですむが、メスは何ヶ月間も体内に子どもをかかえ、子どもが体内にいるあいだも生まれた後も栄養をあたえなくてはならない。…（略）…オスが子どもの数を最大にするには、できるだけ多数のメスと配偶すべきであり、メスは子どもの数を最大にするには、手に入るかぎりもっとも質のいいオスと配偶すべきである。これが、動物界の多数の種に見られる二つの性差——オスが争いメスが選ぶ、オスは量を求めメスは質を求める——を説明する。²³

²¹ ピンカー（2004a:105-106）。

²² 同上書、103-104。

²³ ピンカー（2004b:206）。

ここに人間の性差の生得的な基礎がある。ただし、人間には先に述べたような諸個人の遺伝的多様性があるので、性差も統計的に現われる。なかには正規曲線がほんのわずかにしか重ならない差異もある。売春や視覚的ポルノグラフィを好み、複数の相手や素性のわからない相手とのしがらみのないセックスを好む傾向や暴力的な競争をする傾向は男に顕著に見られる。また、平均で見ると差は小さいが両極端を見ると差が大きいという差異もある。読字障害、学習障害、注意欠陥障害、精神遅滞などは男のほうの発生率ははるかに高い。また、数学の学業成績で非常に優秀な成績をとる学生は男のほうがかかなり多い。さらには平均値が違うという差異もある。頭のなかで対象物や地図を回転させることは男のほう得意だが、目印や対象物の位置を記憶するのは女のほう得意であり、物を投げるのは男のほう得意で、手先の器用さは女のほうが優れている。女は音やにおいに敏感で、表情や身ぶり言語の読み取りが得意であり、言葉の使いかたもなめらかで、音声言語であたえられた素材の記憶にも優れている。²⁴

そして、このような性差は人間が進化の中で獲得してきた生得的な基礎をもっている。男が女よりも平均的に身体が大きいのは、進化の過程で配偶機会をめぐるオスどうしの暴力的な競争が大きかったことの帰結である。人間の脳は発達の過程で性ホルモンの影響を受け、性差を刻印される。性ホルモンは成人の脳の働きにも大きな影響を及ぼす、等々である。²⁵

こうした人間の男女の生得的な性差、とくにその性衝動のちがいについては、上野が家族イデオロギーの生成を動物的個体主義の抑制との関係で論じ²⁶、さらに1992年の京都中央労働学校における『家族、私有財産および国家の起源』講義のなかでそれを敷衍している。しかし、今日、さらに諸科学の成果に学んで、人間の男女の生得的な差異をその生殖における対立関係から生じるものとしてより深く捉え直す必要があると考える。

さて、以上のように、ピンカーは人間の遺伝的基礎ないしは生得的基礎をたんにすべての人間に共通する普遍的なものとしてのみではなく、男女の性差をつうじて、さらには諸個人の多様性のなかで現われるものとして捉えているように思われる。このことを論理学のカテゴリーで捉え直してみれば、それは人間の遺伝的基礎ないし生得的基礎をその普遍、特殊、個別において捉まえるということの意味しているのではないだろうか。人間の遺伝的ないし生得的基礎はすべての人間に共通する普遍的なものを有しながら、男女の特殊な対立関係をつうじて、さらには諸個人の個別的な多様性をつうじて現われるということである。

このように人間の本性をその普遍、特殊、個別において捉えることによって、私たちはマルクスの「全面的に発達した人間」²⁷ ないしは「全体的に発達した個人」²⁸ という提起、さらには資本主義的生産において発展する生産の精神的諸機能と部分労働者たちとの対立²⁹の克服という課題を考え直す必要に迫られる。

諸個人は人間の本性の普遍的なものをたしかにもっているが、しかし、それは性別とい

²⁴ ピンカー (2004c:123).

²⁵ 同上書, 125-133.

²⁶ 動物的個体主義の抑制による家族イデオロギーの成立については、上野(2002:44-47)を参照。

²⁷ マルクス (1983:832).

²⁸ 同上書, 838.

²⁹ 同上書, 627-628.

う特殊な対立に媒介され、さらに個別的な多様性に媒介された形においてである。したがって、諸個人の認知的な能力や社会的な性向にはばらつきがあるのが当然ということになる。だとすれば、「全体的に発達した個人」というのは人間の能力の基本的な部分については言えるとしても、やはり諸個人はその特殊的、個別的な生得的な基礎上でその能力を特殊的、個別的に発展させるしかない。そして、そうした諸個人が分業にもとづいて共同するところにこそ「全体的に発達した人間」が存在すると考えるべきなのではないだろうか。マルクスは一面では、労働者は協業において「彼の個人的諸制限を脱して、彼の類的能力を発展させる」³⁰ ことを分析している。私たちはこのことを基礎にして、人間の諸個人の多様な能力の発達とそれらの総合としての「全体的に発達した人間」を考えることができる。

また、このように考えると、生産の精神的諸機能と部分労働者たちとの対立の克服とは、それらの分業がなくなることではなくて、部分労働者たちを支配する力として精神的諸機能を彼らに対立させる資本主義的生産のあり方を克服することだと考えるべきだろう。精神的諸機能と部分労働者たちとの分業関係は将来社会においても存在するのであって、それが支配—被支配の関係にならないようにする協働のあり方が模索されなければならない。

人間の本性をその普遍、特殊、個別で捉えることは、私たちのこれまでの実践的・経験的理解に科学的な基礎を与えるのではないだろうか。

9. 人間の意識性の生得的制約とその乗り越え

ピンカーの議論は、鈴木らが人間の本性の一つの要素として考えてきた、その意識性、とくに認識能力についても、検討すべき問題を提起しているように思う。

まず、第一にピンカーが、人間の意識は客観的な世界をそれなりに正確に反映するものだと考えている。彼は、人間の意識が客観的な現実をそのままに反映するのだという「素朴实在論」にも、人間の意識する世界は人間の意識の恣意的な構築物だという「構築主義」（「相対主義」）にも反対して、錯視の実例を解説したうえで次のように言う。

素朴实在論を決定的に論破する実証例は、心は現実と断絶しているという考えも論破する。それに変わる第三の考えがある。脳は、祖先の生存と繁殖にとって重要だった現実の諸面についての情報をつかむために働く、誤りやすいが知的なメカニズムを進化させた、という考え方である。この考えは知覚能力だけでなく、認知能力にもあてはまる。認知能力が（知覚能力と同様に）現実の世界に対して調整されているという事実が一番はっきりわかるのは、錯覚に対する反応からである。認知能力は、現実には齟齬がある可能性を認識して、まちがった印象の裏にある真実を見つけ出す方法を採るのである。…（略）…どんな文化においても、人は真実と虚偽、内的な精神生活と明白な現実とを区別し、観察不能の対象物の存在を、それらが残す知覚可能な手がかりから推定しようとする。³¹

³⁰ マルクス （1983:573）.

³¹ ピンカー （2004b:121-122）.

さらに彼は、諸物の特徴の共通性を取り出したカテゴリーについて、それは社会的な構築物であり、空想の産物であるとする相対主義に反対して、次のように言う。

たしかに雪の結晶は一つ一つちがうし、どんなカテゴリーも、あらゆるメンバーについて完璧に正しいとはいえない。しかし知能は、属性の共通する事物をひとまとめにすることに依拠しており、だから私たちは新しいものに遭遇するたびに茫然としなくてすむ。…（略）…私たちは初めて出会う対象物の特性を知覚して、それをあるカテゴリーにあてはめ、そのカテゴリーに典型的な、私たちには知覚できない特性をもっている見込みが高いと推測する。³²

こうしたピンカーの議論は、客観的な世界の実在を認め、さらに人間の認知能力の生得的な基礎とその制約を認めただけで、進化過程での人間と客観的な世界との相互作用をふまえて、人間の意識が客観的な世界を認識できることを示している。そこでは、知覚のみならず、思考についても、その一番の基礎である単純な分析と総合についても、それらが客観的な世界を（部分的にではあれ）正しく捉まえられなかったら、人類は生き残ってこれなかったことが示されている。

かつて向井はルビンシュテインに、鈴木はローレンツやチョムスキーによりながら、唯物論の認識論を発展させようとしてきた。³³ 現時点では、ここで参照されている人間の認知能力に関する科学的成果をふまえて、唯物論の認識論を発展させなければならないと考える。

その際、ピンカーが人間の認知能力の生得的な基礎の制約を強調している点の一つの検討課題である。たとえば、彼は人間集団のカテゴリー化——このことをステレオタイプ化と呼んでいる——も一般にはその集団の特徴をよく反映しているとしたうえで、そこには一つの重要な例外があるとして、次のように言う。

ステレオタイプがまったく的外れになる可能性があるのは、その人がステレオタイプ化された集団とじかに出会う機会をほとんど、あるいはまったくもっていない場合や、判断される側の集団に過剰な敵意をもっている集団に属している場合である。³⁴

この指摘は、人間の認識が客観的な事実とはかけ離れて構成されうること、事実無根の虚偽意識としてのイデオロギーを受け入れる基礎を示している。同時にそれが克服される条件も示している。この点がおもしろい。つまり、この場合はステレオタイプ化された集団のひととじかに会う機会を増やすこと——つまり、客観的な事実に触れること——、あるいは集団間の過度な敵意を取り去ることが、客観的な事実にもとづく認識の前提になる。

さらに考えるべき点は、ピンカーが科学や技術の発展と人間の生得的な認識枠組みとの齟齬について述べていることである。彼は言う。

³² 同上書、125。

³³ 向井(2008a)、同(2008b)、鈴木(1989)を参照。

³⁴ ピンカー (2004b:129)。

私たちの心は私たちに、何百万年も前に祖先が対処していた現実の諸面（物体、動物、人間など）との接触を保たせている。ところが科学やテクノロジーによってそれまで隠れていた新たな世界が開かれると、私たちの素朴な直観が途方に暮れてしまうことがある。³⁵

つまり、人間は進化した環境とうまくやっていくために、そのかぎりまで客観的な世界を捉まえる認識枠組みをもっているが、科学や技術の発展はそれを乗り越えてしまって客観的な世界の新しい諸側面を見せるようになっていく。その諸側面は人間の生得的な認識枠組みでは捉えられないのだというわけである。ピンカーは人間が進化の過程で備えてきた認識枠組みを「直観」と呼んでいる。

人間が進化の過程で獲得してきた「直観」には、これまでの研究成果によれば次のようなものがあると彼は言う。第一に物体の運動に関する直観物理学。その中核は、物体を等速で運動させ続けるには力が必要であるという、インペトゥスという中世の概念に近いもの。第二に生きものの世界を理解するための直観生物学。その中核は、生きものには隠れた本質があって、それが生きものに形態や力、成長や身体機能の原動力、つまり生命を与えているということ。第三は道具などの人工物の理解のための直観工学。その中核は道具は人間がある目的を達成するためにデザインしたものということ。第四にほかの人びとを理解するための直観心理学。その中核は、ほかの人びとは物体や機械ではなく、心あるいは魂という目に見えない存在によって生気を与えられているということ。第五は空間感覚。その地図はそれぞれ別の準拠枠——眼、頭、体幹、目立った物体や場所など——によって編成される。第六は数の感覚。少ない数の物体の個数は正確な量を銘記し、大きい数については相対的な概算をする。第七に確率の感覚。第八は物や行為をやりとりするさいに使う直観経済学。これは give and take、つまり直接的な互惠の交換という概念にもとづいている。第八に考えを表現し、古い考えから新しい考えを導き出すための心のデータベースと論理。そこでは、それは何か、どこに何があるか、だれがだれにいつ、どこで、何をなぜしたかということと、それらの論理的、因果的關係を示すAND, OR, NOT, ALL, SOME, NECESSARY, POSSIBLE, CAUSEなどが組みあわされる。第九はアイデアを共有するのに使う言語。それは記憶された語という心の辞書や、語の組み合わせルールという心の文法に結びついている。³⁶

そして、こうした人間の生得的な認識枠組み、「直観」についてのピンカーの診断は次のようなものである。

これらの理解の方法や中核の直観は、文字や国家をもたず、移動しながらその土地のものを食べ、機転によって生きのび、もち運べるだけの物にたよる小規模な集団の生活様式にあっている。私たちの祖先がこの生活様式を捨てて定住生活をするようになったのはわずか数千年前のことで、それから脳が進化によってかなりの変化をするには時間が短すぎるので、脳はそのころから（仮になんらかの変化をしたとしても）

³⁵ 同上書、156-157.

³⁶ 同上書、157-159.

たいして変わっていない。…(略)…心が専用の機構を進化させることができなかったらしい知識領域は多数あって、そうした領域については脳にも遺伝子にも特殊化の気配がなく、人は赤ちゃんの時代にもそれ以降にも、自然発生的な直感的理解を示さない。そのような知識領域とは、現代物理学、宇宙学、遺伝学、進化論、神経科学、発生学、経済学、数学などである。³⁷

では、生得的な認識枠組み、「直観」に頼れない分野で、人間は新しく目のまに開かれた客観的世界をどのようにして認識するのだろうか。そこでは人間は「昔ながらの心的能力を無理やりに働かせるアナロジーに頼ったり、ほかの能力を断片的につなぎあわせた急ごしらえの心の仕掛けに頼ったりする」。そのために「これらの領域についての理解は、むらがあって浅く、原始的な直観に汚染されてしまう見込みが高い」と、ピンカーは言う。³⁸したがって、生得的な認識枠組み、「直観」に頼れない分野では、独自の教育と訓練が必要である。³⁹「書き言葉や算数や科学を学ぶには学校が必要だが、それはこれらの知識やスキルが発明されたのがあまりにも最近のことで、まだ種全体が要領を進化させるにいたってはいないからである」。

たとえば、科学的な知識やスキルを身につけるために生得的な認識枠組み、「直観」を捨てなければならない領域がある。「ニュートン物理学を学ぶには、まずインペトゥスにもとづいた直観物理学を捨てなくてはならない」し、「現代生物学を学ぶには、その前に、生命のエッセンスという立場から考える直観生物学を捨てる必要がある」し、「進化論を学ぶためには、その前に、デザインを設計者の意図に帰する直観工学を捨てる必要がある」。

あるいは、「通常は無意識のブラックボックスに埋め込まれているスキルをむきだしにして強化する」ことが必要な場合もある。英文の読み方を教えるために、英会話のなかでは不可分の母音と子音を強引に意識させ、それをアルファベットに結びつけることなどはその例である。

さらには、文法の論理を計算に利用したり、空間認知を使って数学的關係の理解を促したり、解剖学や生理学に直観工学を利用したり、化学や生物学に直観物理学を援用したりして、「古い能力を転用して新しい要求に対処させることも必要になる」。

以上をふまえて、ピンカーは「教育の内容はほとんどが認知的に自然ではないため、勉強はおもしろいというまじない文句とはちがって、習得の過程はかならずしも容易で楽しいとは言えない」というギアリーの指摘を引きながら、「子どもたちは、友だちをつくり、地位ステイタスを獲得し、運動スキルを磨き、物理的世界を探究するように生得的に動機づけられているかもしれないが、認知能力を学問としての数学のような不自然な課題に順応させるようにはかならずしも動機づけられていない。学習という、ずっとあとにならないと報いの見えない、努力を要する大仕事をやり抜くための動機を子どもにあたえるには、学業成績に高いステイタスをあたえる家族や仲間集団や文化が必要なかもしれない」と言う。⁴⁰

これらの指摘は、第一に、人間の意識性、とくに認識能力の発展は生得的な認識枠組み

³⁷ 同上書、160.

³⁸ 同上.

³⁹ 同上書、162-163.

⁴⁰ 同上書、164.

に制約されていると同時に、その認識枠組みの応用等によって、その制約が乗り越えられることを示している点で興味深い。人間がその知覚の生得的な制約を道具や機械を発達させることによって乗り越えてきたことは、顕微鏡や望遠鏡などの例でも知られているところである。それと同様のことが人間の思考の認識枠組みについても言えることが示されている。

第二に、現代の諸科学の発展を担い、あるいはそれらをさまざまな分野の実践に応用することを担う「専門家」が育つには、独自の教育と訓練が必要であること、その教育や訓練の過程自身は人間の認識枠組みの生得的な制約に規定されて困難なことが多く、家族や教師や仲間の励まし、あるいは一定の文化的環境が必要だという指摘も示唆に富むものだと思う。科学の後継者育成は、自然発生性にまかせず、意識的に追求しなければならない。そのことが人間の本性という見地から示されている。

同時に、「専門家」の育成に独自の教育と訓練と文化が必要であり、生得的な認識枠組みを超える領域での科学的知見や技術の発達の理解には諸個人の間でばらつきがあるのだとすれば、先に触れた生産の精神的諸機能と部分労働者たちとの分業は現在も将来も合理的な根拠をもつことになるのだろう。この点も示唆に富む。

ところが、ピンカーはそこから生物医学や遺伝子組み換え技術や経済的事象などについての「専門家」と「素人」との対立を説明し、「専門家」の優位性を主張しているように見える。⁴¹ たしかに「素人」の根拠のない反科学の主張に対して、「専門家」が科学の成果をふまえて反論することは必要であるし、そういう「素人」の主張に対するピンカーのいらだちも理解できる。しかし、現代科学の知見はやはりあくまで相対的な真理にとどまっているはずだし、さらには科学の発展のために社会的な資源が使われ、民主的な社会ではそのための社会的な合意が必要なのだから、「専門家」の自制は必要であるし、「素人」の危惧は尊重されなければならない。「専門家」は「素人」にきちんと現代の科学的知見を、それについて判断が可能になるように語る必要がある。ここでもやはり生産の精神的諸機能と部分労働者たちとの対立の克服をめざすべきであって、その際、科学の発展を総括する必要性についての向井の議論⁴²をふまえる必要がある。

10. 人間の共同性の生得的制約とその乗り越え

鈴木らが提起した人間の本性のもう一つの内容、人間の共同性についてはどうだろうか。かつて鈴木は、エソロジーや社会生物学が基礎としているのは「近代ブルジョア社会の生み出したアトミズムの世界観であり、また競争と闘争の場裡につくりだされた市場メカニズムの社会観である」として、「古典的ダーウィニズムから集団遺伝学への、概念枠のようがえが、たんなる利己の視点からでなく、利他をも説明しうる利己の視点から、人間をとらえることをもたらしたにすぎないとしたら、むしろ人間に限定してのことではあるが、そのようがえにどれだけの意義をみいだせよう」と言った。⁴³

⁴¹ 同上書、164-195.

⁴² 向井（2008a:100-101, 334-335）.

⁴³ 鈴木（1989:86-87）.

しかし、今日、生物進化をもっともよく説明するのは遺伝子の変異と自然淘汰、性淘汰を原理とするダーウィン進化論であることは否定しようがないと考える。だとすれば、それが明らかにしている人間の利己的な性向と利他的な性向を「近代ブルジョア社会の生み出したアトミズムの世界観」や「市場メカニズムの社会観」からひとまず切り離して、その意味するところを冷静に考え直す必要があろう。

ドーキンスが「利己的な遺伝子」というカテゴリーで言っている内容は、自然淘汰の単位は遺伝子であり、遺伝子は自己の再生産を原理として運動しているということである。それは種や群が淘汰の単位ではないということを明確にするために言われている面がある。体内淘汰によって選択された遺伝子の変異は生物個体において出現するので、その限りでは自然淘汰と性淘汰は生物個体に対して働くことになる。そして、遺伝子の自己再生産は生物個体の「利己的」な振る舞いとして現われる場合もあるし、「利他的」な振る舞いとして現われる場合もある。この点について、ピンカーは人間の本性とかかわらせて次のように説明している。

生物個体がときにたがいを害するのはなんら不思議ではない。ある動物がほかの動物に対して、たとえば食べる、寄生する、威嚇する、性の相手を横取りするなど、有害な行為をすることによって利益を得ると、そのいやな習性を備えた子孫が優性になる。…（略）…人間の条件の進化にそれ以外のものがなかったとしたら、「人生は最悪、そして死ぬんだ」というロックソングに同意しなくてはならなくなる。／しかし言うまでもなく、人生はつねに最悪だというわけではない。協力や子育てや仲直りをする動物はたくさんいるし、とくに人間は、家族や友人やコミュニティになぐさめや喜びをみいだす。⁴⁴

そして、人間が共同性を進化させていることについて次のような要因をあげている。⁴⁵一つは、「自己の利益を追求しながら同時に他の生物を助ける」という「相利共生、共生、あるいは協同」の関係である。人間では「同じ好みや趣味や敵をもつ友人どうしは一種の共生関係にある」し、「子どもを共有する両親はさらにいい例」だと言う。両親の遺伝子は「子どものなかで一緒になっているので、一方にとっていいことはもう一方にとってもよく」なるからである。そして、「こうした利害の共有が、友愛や夫婦愛が進化する舞台を準備する」としている。

第二は「生物個体が自分を犠牲にしてほかの個体を利するケース」であり、いわゆる「利他行動」である。利他行動の進化には二つの道筋がある。一つは、血縁者に対する利他行動の進化である。「血縁者は遺伝子を共有しているので、血縁者を助ける遺伝子は、たとえ援助者が自分の適応度…（略）…を気前よく犠牲にしたとしても、血縁者のなかにある自分自身のコピーが存続するチャンスを増加させることになる」。このことをつうじて家族愛が進化しうる。

もう一つは、「生物個体が好意や恩恵のやりとりをする」「互恵的利他行動」の進化であ

⁴⁴ ピンカー (2004b:198).

⁴⁵ 同上書, 198-199.

る。「この関係は、当事者どうしがたがいを認識し、相互交流をくり返し、小さなコストで大きな利得をあたえることができ、恩恵を受けた記憶や拒否された記憶を保持してそれに応じた行動を相手に返そうとする衝動をもっているなどの条件を満たしていれば進化できる。互恵的利他行動が進化するのには、孤立したり人を避けたりするよりも協力しあうほうが有利だから」である。

以上からわかるように、人間本性の実相は「近代ブルジョア社会の生み出したアトミズムの世界観」や「市場メカニズムの社会観」で想定されているのとは違って、単に利己的なものではない。しかし、たんに共生的、利他的なもの、つまり共同的なものでもない。利己性と共同性の対立、闘争こそが人間の本性を特徴づけていると考えるべきなのではないだろうか。この点は、マルクスの言う「人類と非人類」⁴⁶の対立、上野の言う「動物的個体主義の抑制」の議論⁴⁷と照らし合わせながら、再度、考えてみるべき点であろう。

ところで、人間の共同性にもやはり生得的な制約があるようだ。その一つは、血縁者の間の共同性と非血縁者間の共同性には大きなちがいがあるということである。ピンカーは次のように言う。

もっともわかりやすい人間の悲劇は、私たちが血縁者に対してもつ感情と非血縁者に対してもつ感情とのちがいから生じる。このちがいは、生きものの世界にある分割線のなかで、もっとも深いものの一つである。…（略）…伝統的な狩猟採集社会では、遺伝的なつながりのある親族は一緒に住んだり、たがいの庭で働きあったり、守りあったり、貧しい者や孤児になった子どもをひきとったりする傾向が高く、攻撃や反目や殺しあいの傾向は低い。血縁者のきずなが切れやすい現代社会でも、相手が遺伝的に近い関係にあるほど援助にかけつける傾向が高い。生死にかかわる状況においてはとくにそうである。／しかし愛情や連帯感は相対的である。身内に思いやりがあるということは、他人には冷淡だということである。⁴⁸

つまり、血縁者の共同性は人間においてもっとも根強いものらしい。だからといって、非血縁者どうしの共同性が発展しないということではない。非血縁者どうしの共同性は「血縁者のような自然発生的な協力関係にはない」⁴⁹ということである。

また、生得的にはもっとも強固なものと考えられる血縁者どうしの共同性も、親子の対立、きょうだい間の対立、男女の対立を含んでいる。子は親の世話を最大限引き出そうとするが、親のエネルギーには限りがある。親は子どもを自分の思いどおりにしようとし、子どもは自分の自由を求める。きょうだいは親の限られたエネルギーをめぐる競争関係にある。男と女では遺伝子を残すうえでの最適な行動のあり方が対立的である。こうして、血縁者間にもさまざまな葛藤が生じる。⁵⁰

他方、非血縁者どうしの共同性は、互恵的利他行動の進化によって基礎づけられている。ピンカーは言う。

⁴⁶ マルクス（1959:329）。

⁴⁷ 上野（2002:44-47）。

⁴⁸ ピンカー（2004b:203）。

⁴⁹ 同上書、208。

⁵⁰ 同上書、208-221。

自分を助けてくれた者を助け、助けてくれなかった者を避けたり罰したりする互惠的な行動者は、交換の利得の恩恵を受けられるの、個人主義者や裏切り者や純粋な利他主義者よりも優勢になる。人間には、互惠の利他行動に必要な能力が備わっている。人間は…（略）…たがいを個人として覚えていられるし、裏切り者に対してタカのように鋭い目とハエとり紙のようにしつこい記憶をもっている。人間が感じる道徳的感情（好み、共感、感謝の念、罪悪感、恥じる気持ち、怒り）は、コンピュータ・シミュレーションや数理モデルで再現されているような互惠の利他行動の戦略を実行するための、なみはずれた道具である。…（略）…人は自分に恩恵をあたえてくれる人を好み、好きな人に恩恵をあたえ、あたえることが可能な恩恵をあたえなかったときに罪悪感をおぼえ、自分に恩恵をあたえるのを差し控えた人を罰する。／ 互惠主義の方針は一对一の交換を導くだけでなく、公益への貢献も導く。⁵¹

ところが、こうした「非血縁者を利する犠牲的行為」は「懸念、不信、罪悪感、恥、怒りなど、一連の不愉快な情動なしには存続できない」と彼は言う。⁵² 例えば、ある民族誌調査によって、狩猟採集社会のバンドでおこなわれる肉の分配——私たちが原始共産主義の典型的なあり方と考えてきたもの——は「敵意を含む」ものとして次のように描かれている。「ハンターは自分の獲物をほかの者たちに内緒にしておく簡便な方法がないので、それほどたくさんの分け前も受けずに、ほかの者が獲物を差し押さえるそばに立っている。狩猟の成果は公益としてあつかわれ、もし差し押さえに抵抗すれば噂話や排斥という罰を受ける。がまんすれば名声によって報われるし（名声があれば性的パートナーを獲得できる）、状況が逆転したときには見返りを受ける資格を得られるだろう」。⁵³

さらにピンカーは、人間が自分たちの仲間とそれ以外を区別し、仲間以外の者には暴力的なふるまいをする傾向があることを指摘している。

私たちはサイコパスでもないかぎり、ほかの人たちに共感をおぼえるので、平気で障害物や獲物として扱うことなどできない。しかしそうした共感は、有史、先史を問わず人びとがしてきた残虐なふるまいの妨げにはならなかった。この矛盾は、人びとが認識する道徳の輪が、氏族や村や部族のメンバーだけを含み、すべての人類を含んでいない場合があることを思いだせば解消できるのではないだろうか。その道徳の輪のなかに入る人間は共感の対象になり、外側の人間は岩や川や一塊の食べ物と同様に扱われる。…（略）…アマゾンのワリ族の言語には、食べられるものと食べられないものとを区別する名詞分類辞があつて、部族のメンバー以外の人間はすべて、食べられるものに入っている。⁵⁴

自分の仲間とそれ以外を区切る境界は状況によって伸縮する。人間は互惠主義や互いを知ることによってその輪を拡大することもできる。「道徳の輪は、ほかの人間が生きてい

⁵¹ 同上書、222-223.

⁵² 同上書、224.

⁵³ 同上書、227.

⁵⁴ ピンカー（2004c:76-77）.

たほうが死ぬよりも有益になる互惠主義のネットワークの拡大にともなって、外側に向かって広がってきた。ロバート・ライトはこのことを、『日本を爆撃すべきではないと私が考える理由はたくさんあるが、最大の理由は、私のミニバンをつくったのが日本の人たちだからだ』と表現した。ほかにもいろいろなテクノロジーが、自分と相手の立場を入れかえて考えることを容易にするコスモポリタンな見地に貢献してきた。そのなかには読み書きの能力、旅行、歴史の知識、それに写実的なアートなど、ほかの時代なら不倶戴天の敵だったかもしれない人びとの日常生活に自分の身を置いてみるのに役立つものも含まれる。⁵⁵

逆に、人間は区別を強調して、仲間とそれ以外を区別する境界を狭くしてしまうこともある。「ジョナサン・グラヴァーは、残虐行為にはしばしば相手を非人間化するやりくちがともなうことを示した——蔑称を使う、悪状況のもとに奥、屈辱的な服装をさせる、苦しみを軽んじる『冷酷なジョーク』を言う、などである。そうしたやりくちによって心のスイッチが切り替わると、ある人が『人間』から『人間ではないもの』に分類しなおされて、ロブスターを生きたままゆでるのと同じくらい容易にその人を苦しめたり殺したりできるようになる」。⁵⁶

以上のような人間の共同性の生得的制約についての知見は、第一に人間の共同性は、それに対立する人間の利己的傾向との絶えざる闘争の中で発展するものと考えべきだということを意味しているように思える。これらの知見は、マルクスの言う「人類と非人類」の対立、上野の言う「動物個体主義の抑制」の議論の一面での正しさを証明するものであるように思う。しかし、人間の本性を共同性のみで見て、人間の利己的傾向を非人間的なもの、動物的なものと規定することでよいのだろうか。共同性と利己性を人間の相争う二つの本質としてとらえることが必要なのではないだろうか。

第二に、人間の共同性の発展を、血縁的共同性を超える互惠的な利他行動の発展としてとらえることが必要である。その場合、上野が1992年の京都中央労働学校における『家族、私有財産および国家の起源』講義のなかで民族の形成史について述べた、人類史を血縁集団から地縁集団への発展としてとらえる議論が想起される。

そのうえで、先の知見をふまえて上野の議論を発展させようとする、商品生産について再度位置づけなおすことが必要であると考え。私たちは、商品生産を個々ばらばらの生産者の人間関係として、したがって人間の共同性を破壊するものとして理解してきた。たしかに古い共同体的関係に対して、商品生産はそうように作用する。しかし、それは同時に古い共同体的関係の狭さを超えて、物と物との関係を媒介した間接的な関係ではあっても、お互いに見ず知らずの生産者間をつなぐものでもある。それはやはり、人間の共同性の発展をになっているのではないだろうか。

以上のことをふまえて人間の共同性の発展を図式的に示せば、以下のように考えられる。

①血縁集団

血縁的共生や血縁者間の利他行動のレベル

②地縁集団

血縁集団を超えた狭い地縁的共同体での互惠的利他行動のレベル。古典古代のポリス

⁵⁵ 同上書、78.

⁵⁶ 同上書、78-79.

市民の関係や中世の村落共同体の構成員間の関係。

③商品関係

商品交換を媒介にした互惠主義のレベル。それは、狭い血縁的・地縁的关系を超えて、世界的に人間を結びつける。

もちろん、商品関係を世界に行き渡らせるのは資本であって、現代の資本主義世界では商品関係の基礎上に資本の搾取関係、さらには独占的な収奪関係が展開している。しかし、私たちは商品関係があれば、必然的に資本関係が生まれるとは考えていない。だから、将来社会を準備する資本主義の役割の一つとして、商品関係を世界中に行き渡らせ、間接的な関係であっても、血縁的結びつきや狭い地縁的結びつきを超えて人びとを結びつけることを位置づけるべきと考える。さらに将来社会においても、直接的に人間が結びつくことのできる範囲は狭いのだから、商品関係をつうじた人びとの結びつきの広がりが人間の共同性の発展を基礎づけるということも考えるべきではないか。

また、将来社会の分配原則との関係でも、商品関係を考え直してみる必要があるように思う。マルクスは『ゴータ綱領批判』で、将来の「共産主義社会のより高度の段階」では「精神労働と肉体労働との対立がなくなつて」「個人の全面的な発展」が実現し、「各人はその能力におうじて働き、各人はその必要に応じて受け取る」という分配原則が支配すると思った。それと対比して、「いまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」では、「各人はその能力に応じて働き、各人はその労働に応じて受け取る」という原則が支配するとした。そこでは「商品交換が等価物の交換であるかぎりでの交換を規制するのと同じ原則が支配している」とし、それは「旧社会の母班をまだおびている」のであって、「ブルジョア的な制限につきまといわれている」と考えた。

しかし、これまで見てきたところによれば、諸個人の能力の多様性は人間の本性の一面であり、生産の精神的諸機能と部分労働者たちの分業をなくすことは将来社会でもできないであろう。さらに、人間の共同性は利己的性向によってつねに脅かされている。それらのことを前提にすると、「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という原則は、一方でフリーライダーを生み、他方で能力ある人びとのやる気を削ぐことになる。それを国家の専制的な強制によらずに避けるためには、やはり「能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」という原則、つまり商品交換にもとづく原則を将来社会における分配の基本原則として位置づけなければならないのではないだろうか。

11. おわりに

以上、ダーウィン進化論にもとづいて人間本性論を考え直す場合、どんな問題を検討すべきかについて考えてきた。忌憚のない批判と議論をお願いしたい。

⁵⁷ マルクス (1968:19-21)。

参考文献

（1節～4節）

- Boeckx, Cedric (2010) *Language in Cognition: Uncovering Mental Structures and the Rules Behind Them*, Wiley-Blackwell, Chichester, West Sussex.
- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*, Mouton, The Hague.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1968) *Language and Mind*, Harcourt, Brace & World, New York.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2000) *New Horizons in the Study of Language and Mind*, Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Chomsky, Noam (2005) "Three Factors in Language Design," *Linguistic Inquiry* 36, 1-22.
- Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," In Uli Sauerland and Hans-Martin Gartner (eds.) *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, 1-29, Mouton, Berlin.
- 池内正幸（2010）『ヒトのことばの起源と進化』開拓社，東京。
- 岡ノ谷一夫(2010)『さえずり言語起源論』（岩波科学ライブラリー176）岩波書店，東京。

（5節～11節）

- 長谷川寿一，長谷川眞理子(2000)『進化と人間行動』東京大学出版会，東京。
- カール・マルクス（大内兵衛・細川嘉六監訳）(1959)『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻，大月書店，東京。
- カール・マルクス（大内兵衛・細川嘉六監訳）(1968)『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻，大月書店，東京。
- カール・マルクス（資本論翻訳委員会訳）(1983)『資本論』第3分冊，新日本出版社，東京。
- 向井俊彦(2008a)『向井俊彦の探究第2巻 2001年の哲学案内——講義録・「フォイエールバッハ論」と現代』文理閣，京都。
- 向井俊彦(2008b)『向井俊彦の探究第1巻 唯物論とヘーゲル研究【増補版】』文理閣，京都。
- スティーブン・ピンカー（山下篤子訳）(2004a)『人間の本性を考える——心は「空白の石版」か』上巻（NHKブックス110）日本放送出版協会，東京。
- スティーブン・ピンカー（山下篤子訳）(2004b)『人間の本性を考える——心は「空白の石版」か』中巻（NHKブックス110）日本放送出版協会，東京。
- スティーブン・ピンカー（山下篤子訳）(2004c)『人間の本性を考える——心は「空白の石版」か』下巻（NHKブックス110）日本放送出版協会，東京。
- 鈴木茂(1982)『偶然と必然』有斐閣選書，東京。
- 鈴木茂(1989)『鈴木茂論文集1 理性と人間』文理閣，京都。
- 上野俊樹(2002)『上野俊樹著作集第3巻 構造主義とマルクス主義——アルチュセールとプーランツァス』文理閣，京都。